

富山県のオオサルハムシ

— 附：本種の寄主植物に関する覚書 —

鈴木邦雄¹⁾・岩田朋文²⁾・南 雅之³⁾

¹⁾939-0364 射水市南太閤山 14-35 (kunimushi@shore.ocn.ne.jp)

²⁾939-8084 富山市西中野町 1-8-31 富山市科学博物館 (iwata@tsm.toyama.toyama.jp)

³⁾180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 3-17-7 (minami8535@yahoo.co.jp)

Chrysochus chinensis Baly, 1859 (Chrysomelidae, Eumolpinae) in Toyama Prefecture, Chûbu District, Japan, with Some Notes on Its Host Plants

Kunio SUZUKI¹⁾, Tomofumi IWATA²⁾ and Masayuki MINAMI³⁾

¹⁾14-25 Minami-Taikôyama, Imizu-shi, Toyama, 939-0364 Japan

²⁾Toyama Science Museum, 1-8-31 Nishinakano-machi, Toyama-shi, 939-8084 Japan

³⁾3-17-7 Kichijôji-Honchô, Musashino-shi, Tokyo, 180-0004 Japan

オオサルハムシ *Chrysochus chinensis* Baly, 1859 は、ハムシ科、サルハムシ亜科に属し、本州・四国・九州に分布する大形種である。国外では、朝鮮半島・中国・シベリア・モンゴルから知られている。本種は、富山県からは東部の下新川郡宇奈月町栃屋で1935年に採集されたのが唯一の記録である(田中, 1939, 1966, 1979)。鈴木は、1974年以降、県下各地でハムシ相を意識的に調査してきたが、未だに再発見できない種の一つである。鈴木は、1930年代から1970年代まで約半世紀にわたって富山県下の昆虫相全般の解明に尽力した田中忠次氏が多くの報告中で記録してきた県産ハムシ類中、問題のあるいくつかの種について、2014年に氏の昆虫コレクションが収蔵されている富山市科学博物館の標本を調べたが、記録の元になった標本を確認できたものとできなかったものがあり、本種は後者に属する。本種の採集記録は全国的にも少ないが、ネット情報などによれば、青森県から四国・九州に至る各地から報告があるようである。後述

のように北信越地方の諸県では比較的近年の採集記録も少数ながら報告されていることもあり、富山県下にも生息地が現存している可能性があるのではないかと推測してきた。田中コレクションは、現在も整理作業が進行中である。2017年11月、田中コレクションを再調査したところ、2014年の調査時にはチェックできなかった未整理の標本中に、田中(1939)の報告の元になったと思われる1935年に採集された3個体の標本を見出した(図1)。それは、採集後82年を経ているものであり、保存状態はあまり良くないが、同定には支障のない標本である。また、バック入りの未整理の田中コレクション中に、1976年にやはり県東部の黒部市の山間地で採集された2個体を発見した。その2個体は、これまで田中自身の多くの報告中にも見当たらないものであり、田中コレクションに含まれるハムシ類の標本の採集記録を含んだいくつかの報告にも該当する記録は見当たらない。それら2個体も、採集されてから既に41年が経過している



図1. 今回発見された1935年5月20日、宇奈月町音澤栃屋で田中忠次氏によって採集されたオオサルハムシ。A, 現存する3標本。B, 標本に付されたラベル。スケールバーは5 mm。



図2. 1976年7月18日に黒部市嘉例沢で田中忠次氏によって採集された2標本。スケールバーは5 mm.

が、県東部一帯の自然環境にはそれほど大きな変化は認められないことから、本種の個体群が現在も生息している可能性は高いものと推測される。

以下、今回確認できた富山市科学博物館収蔵の田中コレクション中の本種の採集データを挙げておく。いずれも、本種の富山県産標本として初めて採集データが公表されるものであり、現時点ではこれら2ヶ所のみが既知産地ということになる。

3 exs., 下新川郡宇奈月町栃屋 (現黒部市宇奈月町音澤栃屋), 20-V-1935, 田中忠次採集 (図1)。

2 exs., 黒部市嘉例沢, 18-VII-1976, 田中忠次採集 (図2)。

文献渉獵がまだ不十分ではあるが、現在までに把握し得た近隣の北信越諸県における本種の生息分布状況を概観しておく。新潟県では、新潟県中頸城郡大潟町 (現上越市大潟区) で1998年7月12日に10個体、2002年7月29日に1個体採集された記録の報告がある (岩井, 2002)。長野県では、中根 (1942) の野尻湖畔からの古い記録があるが、7・8月という採集月以外は記されていない。他者の採集した標本には採集者名が明記されていることから、1939～1941年に中根自身が採集したものと推測される。中根は、採集時の状況や寄主についても述べている (後述)。石川県では、金沢市十一屋町で1968年7月3日に採集された記録の報告がある (高羽ほか, 1998)。岐阜県では、名和 (1935) による岐阜市黒野での古い報告がある他、同所で1979年6月17日に採集された2個体が記録されている (磯野, 1982)。福井県からは、福井県博物学会編 (1938) 『原色福井県昆虫図譜』 (福井県) のPl. 14, No. 26 (図2, 3) に「オオルリハムシ *Chrysolina virgata* (Motschulsky, 1860) (ハムシ亜科 Chrysomelinae) として図示されていた標本が、斎藤 (2008) によって本種の誤同定であることが明らかにされた。同標本の採集データは以下の通り：吉

田郡西藤島村 (現福井市三郎丸町), 1933年6月23日, 西藤島小学校提出。同図譜は、1933年に福井県内の教育関係者総動員で行なわれた調査結果がまとめられて公刊されたもので、図版に掲載された標本は“天覧標本”として戦時中も厳重な保護を受け、図版の配列状態のまま今日まで福井大学教育地域科学部に保管されているという。

本種の生態についてはほとんど明らかにされていないが、北信越地方では成虫の活動期は5月下旬から7月下旬にかけてである。参考までに挙げておくと、岩井 (2002) は、山形県東村山郡山辺町畑谷での2001年8月11日の採集記録も報告している。長崎県佐世保市では、成虫の出現期は4月下旬～6月中旬とのことである (西海学園高等学校科学同好会, 2007)。

附：本種の寄主植物に関する覚書

本種の寄主植物について、現時点で筆者らが気づいたいくつかの点について簡単に触れておく。植物の学名表記は、1990年代以降急速に進展した核酸の塩基配列に基づく被子植物の新分類体系 (いわゆる「APG体系」) (「APGIV」が最新版; APG, 2016) に依拠して編纂された『改訂新版日本の野生植物』 (全5巻, 平凡社) に従った。一部、非自生植物に関しては、同じくAPG体系に従った『APG原色牧野植物大図鑑』 (全2巻) に従った。Kimoto (1964) によれば、Chen (1940) は、中国ではサツマイモ *Ipomoea batatas* L. (ヒルガオ科 Convolvulaceae) とサトイモ *Colocasia esculenta* (L.) Schott (サトイモ科 Araceae) を寄主としているという。中根 (1942) は、「[野尻]湖畔でイヨカヅラの葉を盛に食害しつつある本種を10頭採集し他にレンゲショウマ?の葉上でも見られた」と記し、「サツマイモの害蟲として知られる。竹内氏のスギナ、ハヘドクサウは食草としては些か疑問に思はれる」とも述べている。中根 (1963) は、イヨカヅラ *Vincetoxicum japonicum* (C. Morren et Decne.) Decne (キョウチクトウ科 Apocynaceae)・サツマイモを挙げているが、それは1942年の自身の報告に依拠していると推測される。磯野 (1982) は、岐阜市黒野の低層湿原のイヨカヅラから得られていると記している。草刈 (1987) は宮城県泉ヶ岳中腹の湿性草原で、岩井 (2002) は新潟県上越市でそれぞれシロバナカモメヅル *Cynanchum sub lanceolatum* var. *macranthum* Maxim. (= *Vincetoxicum sub lanceolatum* (Miq.) Maxim. var. *macranthum* Maxim.) (キョウチクトウ科) から採集したことを明記しており、岩井 (2004) はその後成虫が埼玉県北川辺町本郷でコカ

モメヅル *Tylophora floribunda* Miq. (オオカモメヅル *Tylophora aristolochioides* Miq. のシノニムとされている; キョウチクトウ科) を摂食しているのを報告している。佐藤 (2002) も、秋田市大滝山で同種を、貯水池周辺湿地帯でオオカモメヅルを摂食していたと報告している。木元・滝沢 (1994) は、イヨカズラ・シロバナカモメヅル・サツマイモに加えてガガイモ *Metaplexis japonica* (Thunb.) Makino (キョウチクトウ科) を挙げている。西海学園高等学校科学同好会 (2007) は、長崎県佐世保市吉井町の五蔵池周辺で、アオカモメヅル *Cynanchum ambiguum* (Maxim) Matsum. (現在、クサタチバナ *Vincetoxicum acuminatus* Decne. のシノニムとされている) に発生していることを報告している。Tan, Wang & Zhou (2005) は、本種の寄主として、サトイモ、タイツリオウギ *Astragalus shinanensis* Ohwi (ゲンゲ属の1種 *Astragalus membranaceus* (Fisch.) Bunge として; マメ科 Fabaceae (Leguminosae)), バシクルモン属 *Apocynum* (バシクルモン *A. venetum* L. var. *basikurumon* (H. Hara) H. Hara; キョウチクトウ科 Asclepiadaceae), イケマ属 *Cynanchum* 2種 (*C. thesioides* (Freyn) K. Schum. var. *australe* (Maxim.) Tsiang et P. T. Li, *C. chinense* R. Br.), サツマイモ属 *Ipomoea* 2種 (サツマイモ, ヨウサイ *I. aquatica* Forssk) (ヒルガオ科 Convolvulaceae), ヨウシュチョウセンアサガオ *Datura stramonium* L. (ナス科), ナス *Solanum melongena* L. (ナス科 Solanaceae) を挙げている (植物名は中国名のみしか挙げられていないため, 主に『中国高等植物図鑑』によって特定)。本種の寄主植物は、『改訂新版日本の野生植物』によれば, 単子葉類オモダカ目のサトイモ科, 真正双子葉類マメ目のマメ科, リンドウ目のキョウチクトウ科, ナス目のヒルガオ科・ナス科に属していることになる。リンドウ目とナス目は系統的に極めて近いとされる。つまり, 本種は, 典型的な分断狭食性 disjunctive oligophagy を示している。日本における本種の寄主植物の報告は, ほとんどヒルガオ科とキョウチクトウ科に限られ, それらは平野部から丘陵地・低山帯の池沼や溜池・海岸近い潟などの周辺部や湿性草原などに生育する植物である。今後, そうした環境下を探索することによって新たな生息地が発見される可能性が大きい。

末筆ながら田中コレクションの調査にあたってご配慮いただいた富山市科学博物館の元館長根来

尚博士, 文献調査にご協力いただいた林成多博士 (ホシザキグリーン財団) に深謝する。

引用文献

- APG (Angiosperm Phylogeny Group), 2016. An update of the Angiosperm Phylogeny Group classification for the orders and families of flowering plants: APGIV. Botanical Journal of the Linnean Society, 181: 1–20.
- 中国科学院植物研究所主編, 1980. 『中国高等植物図鑑』 (全5巻) 科学出版社, 北京.
- 福井県博物館編, 1938. 『原色福井県昆虫図譜』. 42 pp. + 72 pls. 福井県.
- 磯野昌弘, 1982. 岐阜県のハムシ類. 岐阜県昆虫分布研究会編『岐阜県の昆虫 (岐阜県昆虫分布調査報告)』 (566 pp.): 171–176, 491–505.
- 岩井大輔, 2002. 山形県と新潟県におけるオオサルハムシの記録. 月刊むし, (382): 23.
- 岩井大輔, 2004. 埼玉県におけるオオサルハムシの記録. 甲虫ニュース, (145): 25.
- Kimoto, S., 1964. The Chrysomelidae of Japan and the Ryukyu Islands. IV. J. Fac. Agr., Kyushu Univ., 13: 235–262.
- 木元新作・滝沢春雄, 1994. 『日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説』. xvii + 539pp. 東海大学出版会, 東京.
- 草刈広一, 1987. オオサルハムシの一食草. 月刊むし, (198): 38.
- 邑田 仁・米倉浩司編, 2012–3. 『APG 原色牧野植物大図鑑』 I–II. 北隆館, 東京.
- 中根猛彦, 1942. 野尻湖畔の葉蟲相 [野尻湖畔地方の昆虫 特に昆虫相に関する報告 (I) 附: 野尻湖畔地方の昆虫相調査に就て]. 昆虫界, 10 (96): 4[69]–29[94].
- 中根猛彦, 1963. ハムシ科 Chrysomelidae. 中根猛彦・大林一夫・野村 鎮・黒沢良彦編『原色昆虫大図鑑』 (18 + 443 pp. + 192 Col. Pls.): 320–348, Pls. 160–174. 北隆館, 東京.
- 名和梅吉, 1935. 日本産葉虫類に就いて (承前). 昆虫世界, 39 (10) : 3[401]–5[403].
- 大橋広好・門田裕一・邑田 仁・米倉浩司/木原浩編, 2015–2017. 『改訂新版日本の野生植物』 1–5. 平凡社, 東京.
- 西海学園高等学校科学同好会, 2007. オオサルハムシの研究. 平成19年度長崎県高等学校科学発表大会発表要旨, 14 pp.
- 斎藤昌弘, 2008. 福井県産オオルリハムシ標本の正体. 甲虫ニュース, (164): 9–10.
- 佐藤福男, 2002. 秋田県のハムシ追加種 (II). 秋田自然史研究, (44): 11–14.
- 高羽正治・井村正行・西原省吾・中田勝之・高田兼太, 1998. COLEOPTERA コウチュウ目. 石川むしの会・百万石蝶談会編『石川県の昆虫』 (537 pp.): 102–251. [マメゾウムシ科: 217; ハムシ科: 217–233; いずれも高羽担当]
- Tan, J.-J., S.-Y. Wang & H.-Z. Zhou, 2005. Coleoptera Eumolpidae Eumolpinae. Fauna Sinica Insect Vol. 40. xvi + 415 pp. 8 Col. Pls. (76 Figs.), Science Press, Beijing.
- 田中忠次, 1939. 黒部川流域産昆虫目録 (2) [鞘翅目]. 昆虫界, 7(64): 29–40.
- 田中忠次, 1966. 富山県産ハムシ科目録. AMICA (富山県昆虫同好会誌), 10(1): 1–10.
- 田中忠次, 1979. COLEOPTERA 鞘翅目. 富山県昆虫研究会編『富山県の昆虫』 (545 pp.): 341–458. 富山県. [ref. ハムシ科: pp. 406–420]

(2017年11月21日受領, 2017年12月4日受理)